

〔S-077〕 **FADING IN FADING OUT**

前述のリーフレットは、最初のラインから歌詞の聴き取りを間違えている。結果として、対訳も不正確。『Life Is Strange 人生は不思議さ』ではなく、Life is fast. (人生はどんどん進んで行く) である。

ヴァース 1 中程の『Why Give It Up』もエラー。正しくは Why give up when there's a chance to start again?。自動詞になっている。

There's a light out there. の light には、真理や希望といった精神的光明の意味もあることを覚えておこう。ビートルズの〔The Word〕、〔The Inner Light〕、〔Blackbird〕、〔Let It Be〕に用例があった。

コーラス。fade out (徐々に消える) という言葉は昔からあったが、fade in (徐々に現れる) というのは、かなり最近の造語ではないだろうか。例えば、ビートルズの〔Eight Days A Week〕のイントロについて耳にしたような記憶は、私にはない。そもそも、fade の基本的な語義は「度合が衰える」ということなので、その結果として out (無くなって) はあっても、in (出てきて) は理屈に合わない。面白い技術用語だ。映画／放送業界から音楽業界に入り込んだと思われる。

それで、この文脈における解釈はどのようになるだろうか。私は、人が生まれてから段々と成長するのが fading in で、段々と齢を増して死に至るのが fading out と読む。

なお、コーラス部末尾の fading in and fading out は、他動詞 figure out の直接目的になっている。よって、『はっきりさせるためにすごく時間がかかることもあるけど フェード・イン、フェード・アウト』というのは誤訳だ。It takes so long sometimes to figure out fading in and fading out. の正訳は、「フェードインしてフェードアウトすることを理解するのに時間がかかることもある」ようになる。

ヴァース 2。lightning (稲妻) に喩えられているのは、when it's gone を考えると、一時的な事柄。よって、神の啓示などではなくて、幸運な出来事ではないだろうか。そして、But when it's gone, we're never left without the light. に対する『消えてしまえば僕らには光もない』という和訳は、どんなでもない誤訳。正しくは、「稲

いる) から分かる。そして、続く I know that I'm outside a door that I can't open. (扉を開けられない) が、自分で治そうと思っても治らないことを言っている。

歌詞の輪郭と要点をつかんだところで、細部を見てみよう。ヴァース 1 は問題ないとして、ヴァース 2 は単純明解でないことが、対訳からうかがえる。まず、冒頭の if I could take back all the things I've done だが、帰結節がない。願望を表す感嘆文として独立したものと察せられる。「やってしまったことを取り消すことができればなあ」という感じだ。

その次の When I live in the past, I relive every one. が仮定法ではなくて直説法の文であることに注目。つまり、実際に過去を回想、反省していると考えられる。その意味だが、『過去に住めるなら、みんなを安心させたいよ』という対訳は、まったくの誤訳。私が対訳者ならば、「過去にやってしまったことの一つ一つをやり直したい」のような意識になる。この every one (everyone ではない) は、前のラインを受けて、every one of the things I've done のこと。relive (再び体験する) が relieve (やわらげる) でないことは、もちろんである。

その後の『自分に嘘をついていたから わかったよ 自分の心をまっぴたつに引き裂いたのさ』も、ほぼ誤訳。lying to myself という分詞構文は、理由ではなく、付帯状況(並行)を表わしていると解釈するのが自然だ。Lying to myself, I knew I'd break my heart in two. は、「自分自身を惑わすようなことをして、その結果として自分の心が引き裂かれることになるということが、自分で分かっていた」という意味である。

ミドル末尾における『“ 真実の愛” って言葉を僕は口にすることがないから』という対訳は、逐語訳にすぎない。この文脈における speak は、「その言葉を実践するような行動をする」というような意味。よって、The words “true love” I've never spoken. は、「‘ 真実の愛’ と言われるような愛し方をしたことは、僕には一度もない」と訳すのが望ましい。

VICP-63072 付属のブックレット (akiyama sisters inc. 対訳) は、ヴァース 3 に関して、聴き取り間違えと誤訳の両方を犯している。『What I Did I Can't Undo』ではなくて、What I did I can't undo. 。その意味は、『僕がしてしまった取り消せ

ていた時、君は僕のことを思い遣ってくれた)で私に閃いたのは、マッカートニーの亡妻リンダ。このラインと〔Maybe I'm Amazed〕の中の Maybe I'm amazed at the way you pulled me out of time and hung me on a line. (調子が悪かった僕を助けて、絶好調にしてくれた)が、私の頭の中で被ったのだ。

私の想像を進める。ヴァース 2 は、リンダに乳癌が発見された時のことではないだろうか？ 私が注目するのは how unafraid you were 。相手は、怖がる素振りを話者に見せなかったと読める。話者に対する思い遣りである。

ヴァース 3 の stick by me during the final bout and listen to the referee as I was counted out は、闘病の最終段階のことかも知れない。そうだとすると、医師から余命宣告を受けた当人(相手)のほうが、精神的に混乱していた話者に寄り添っていたと解することができる。ボクシングで使う用語で状況を表現するあたりにも、マッカートニーのウィットが現れている。

〔M-322〕 JENNY WREN

一聴すると、架空の女性の姿を借りて、マッカートニーが社会批判を行うと同時に、修正を呼び掛けているように聞こえる。そうだろうか？ 丁寧な読解を試みてみよう。

難しい歌詞とは思えないのだが、TOCP-66460 の説明書き(今井スミ対訳)には誤訳がある。まず、ヴァース 2 の She could see the world and its foolish ways だが、『彼女は世界を見渡すことだってできたんだ そんな風に愚かなやり方で』という意味ではない。活動的になった(took wing)「彼女は、世の中のことが、そして世の中の愚かな行いが、よく分かった」という意味である。

続くブリッジ 1 の — how we spend our days, casting love aside, losing sight of life day by day (愛に無頓着で、人生の意義を見失った日々を過ごしている)は、前述の its foolish ways の説明になっている。

その説明の具体例を挙げたのがヴァース 3 で、貧困と戦争を取り上げている。この Wounded warriors took her song away. だが、『傷ついた戦士たちが 彼女が

ると、ミルズは9歳の時、貧困のためとは記されていないが、家庭崩壊を経験している。そして、彼女の祖父は陸軍大佐、父は落下傘兵だったとのこと。マッカートニーと再婚した当時の彼女がいわゆる活動家（とりわけ地雷禁止運動）だったことを考えると、この解釈に辻褄が合わないことはない。特に、ブリッジ 2 における all because of you については、マッカートニーがミルズを喜ばせるために書いた可能性も十分あるだろう。

〔M-323〕 AT THE MERCY

最初に、題名の意味を考えよう。at the mercy of とは、OXFORD DICTIONARY OF ENGLISH (2nd Edition) によれば、completely in the power of のこと。つまり、「～のなすがままになって」とか「～にあしらわれて」という意味である。そして、この歌においては、who can? 、we/I can (not) 、we can (only) の状況を説明する位置にある。ということは、『なすがままに [中略] 身を任せよう』という対訳は、能動的な〔Let It Be〕からバイアスを受けた結果であろうが、正確ではない。この歌における at the mercy of は、「～のせいで…するしかない」という、受動的な意味なのだ。

マッカートニーは、前述のインタビューにおいて、歌ができた過程を語った。最初に at the mercy というフレーズが思い浮かび、それを繰り返していると at the mercy of a busy road へ発展。その後、意味のある歌詞にまとめあげたようだ。彼の説明： So that's the kind of thing I was thinking of that how life can throw you a curve ball [中略] and it's a similar scene to Maxwell's Silver Hammer. Only that was like a comedy, dark black comedy based on that idea. You never know what's round the corner kind of thing. (私が考えたのは、人生はカーブ球を投げてくることがあるということです。Maxwell's Silver Hammer と同じようなシーンです。あれはブラックコメディ的でしたけれど。ちょっと先に何が起こるか分からない、というようなことです)。

歌詞の中に、私にはマッカートニーの意図がはっきり掴めないラインがある。それはヴァース 1 中程の I know you'd never make me choose between the love I've got and the love I'd lose. (既に手にしている愛と、失うことになるであろう愛の、

RAIN と同じく、デイヴィッド・カーニ (David Kahne) だった。このようにして、**MEMORY ALMOST FULL** (邦題 “ 追憶の彼方に ”) が2007年6月にリリースの運びとなった。

memory という言葉は、近年ではコンピューター関連用語として使われることが多い。マッカートニーがこのアルバムの題名を思い付いたのも、携帯電話に表示されたアラートの文面とのこと。THE LYRICS: 1956 TO THE PRESENT に収録されている自身の説明: The album title actually came from a prompt on my phone saying I had too much stuff there. But I thought, “Our memories are almost always full these days; there’s just so much going on.” I thought it was a poetic way to sum up modern life. (アルバム・タイトルは携帯電話のプロンプトから取りました。メモリーが満杯というアラートでした。それで思ったのは、「昨今は進行中の物事が多くて、人々の頭もいつも記憶で一杯」ということです。現代の社会生活を詩的に要約しているタイトルだと思いました)。他方、ウェブサイト paulmccartney.com に載った彼の説明は次のとおり: In places, it’s a very personal record, and a lot of it is retrospective, drawing from memory, like memories from being a kid, from Liverpool and from summers gone. (レコードの所々で個人的なことを歌っています。その多くは、記憶から取り出した回想。例えば、リヴァプールで育った思い出とか過ぎ去った夏の思い出とか)。

〔M-338〕 **DANCE TONIGHT**

左利き用のマンドリンをたまたま入手したマッカートニーが、コードの弾き方を自習している際にできた産物。マッカートニーが意図したとおり、シンプルで分かりやすい歌として完成しているので、詞の意味も容易につかめるはずだ。

ところが、UCCO-9151/2 の付属ブックレット (ザ・ビートルズ・クラブ解説、ザ・ビートルズ・クラブ対訳) に記されている和訳に、私には納得できない部分がある。それは、dance around を『踊りまくる』としていること。副詞 around には「むやみに」とか「徹底的に」というような語義はないはず。その基本的な語義は「周りで」とか「回って」である。では、dance around は「そこいらで踊る」とか「踊り回る」なのか? 私はそうだと思う。なぜなら、マッカートニーが次のよ

〔M-342〕 **YOU TELL ME**

過ぎ去った夏を回想しようとする歌詞が、哀愁を帯びた旋律に乗っている。しかし、CD付属のブックレットに載っている対訳が粗末。まず、ヴァース1の The bright-red cardinal flew down from his tree. が『真っ赤な蝶が木の上から羽ばたき降りた』とは。cardinal の和名はショウジョウコウカンチョウのようだが、このチョウは『蝶』ではない。「鳥」である。米国のプロ野球（MLB）を良く知っている人ならば、カーディナルズ（St. Louis Cardinals）のユニフォームには紅色の鳥が描かれていることを知っているであろう。あの鳥である。この対訳は、粗末どころか、誤謬だ。

どのくらい前の夏のことだったのか明確に覚えていない話者（マッカートニー）が You tell me. (いつのことだったかな?) と尋ねる。相手はリンダのはず。その訳は、彼女の父親が住む家（ニューヨーク州ロングアイランド）を一家で訪ねていた時に見た光景とのことだからだ。

ヴァース2における sweet old honeybee を『甘く年老いた蜜蜂』と逐語訳するのは、英語を習いたての中学生ではあるまいし、私には理解できない。そもそも、ミツバチ個体の年齢が話者に分かるはずがない。この sweet は「愛らしい」。old は「親しみを感じさせる」という意味。単に「かわいいミツバチ」と和訳すれば、話者が感じた雰囲気伝わると思われる。

ミドル1の Is it truly how I feel? を和訳するのは難しい。「気持ちをうまく言い表せたかな?」というような意識でよいだろうか。

ミドル2では、Were we there? に Was I really there with you? が加わる。過去の記憶が、もしかすると、亡きリンダについての記憶すら徐々に薄らいでいくことを感じていたのではないだろうか?

ヴァース3の When was that summer of a dozen words? を、私はかなり最近まで誤解していた。文字どおり『12の言葉』でないことは分かっていたものの、形容詞句 a dozen を「多くの ⇒ いろいろな」と推測していたのだ。2013年に出た THE LYRICS : 1956 TO THE PRESENT にマッカートニーの説明がある: When everything's going really well, nobody needs to talk, so you may just be sitting

イタルアイリス号。2014 年の時点で未だ健在、航行中だったのだ。その河の名が由来となったサウンドがマージービート（日本では‘リバプールサウンド’と呼ばれた）で、Mersey-beating with the band という語句で、このヴァースに出てくる。定冠詞付きの the band は、ビートルズにほかならない。

ヴァース 4 は、そのビートルズが初めてテレビのカメラの前で演奏した時のことと考えられる（1962 年 8 月 22 日）。under contract in the cellar（地下の食料貯蔵所での出演契約の履行中で）と言及されているように、場所はキャヴァン・クラブだった。sweating cobwebs は「汗をかいて、喉が渴いて」という意味ではないだろうか。映像を見ると、マッカートニーの顔は汗で光っているように思われる。じめじめした狭い地下室、多くの観衆、身体を動かしながらの演奏と歌唱を考えると、「汗だくで、喉がからから」になるのが自然だ。

ミドル 2 の中盤は、ミドル 1 とは少し違っている。If fate decreed that all of this would make a lifetime, who am I to disagree?（こういったことがすべて合わさって一つの人生になる、と運命が定めたのであれば、僕はそれに従うしかない）も、含蓄のある文言だ。

ヴァース 5 の a cappella at the altar（祭壇でのアカペラ）については、例えばビートルズの公式伝記 THE BEATLES（Hunter Davies 著）の中に次のような記述がある： Later on he did join St. Chad's Choir, near Penny Lane, for a while.（後に、短い期間だったが、ペニー通りに近い聖チャド教会の聖歌隊に加わった）。

ヴァース 6 は、ヴァース 4 とは微妙な違いがある。under contract が消えて at the party が現れるということだけではない。in the cellar ではなくて in a cellar になっているのだ。つまり、場所はキャヴァン・クラブとは別の地下室。「パーティー」が a party でなく the party になっていることも、聞き逃せない。私が受けた感触を述べると、マリファナ（もしくはセックス）の臭いがする。この場合、TV は transvestism（服装倒錯）ということになるだろうか。ダブルミーニングを組み込むのが好きで得意なマッカートニーなら書きそうな詞である。と言っても、おそらく、事実の回想ではなくて、冗談を追加したのだろう。

サウンドと言い、詞と言い、実に楽しい歌だった。

のダブルミーニングと思われる。その後の *Destiny was calling. I just couldn't stick around.* は、マドリン通りからの転出ではなく、リヴァプールからの転出のこと。

そこで問題なのが *Liverpool, I left you, but I never let you down.* の後半の読み方。TOCP-70465 に付属する説明書き（宮治ひろみ対訳）では『でも決してお前をがっかりさせないよ』と和訳しているが、私は同意できない。なぜなら、原文は未来時制の *but I'll never let you down* ではない。現在時制で習慣を表わしているとも考えられない。文脈に従って素直に読むと、これは過去時制であろう。その意味は、「でも、決して見捨てたわけじゃないんだよ」。その理由は、直前で言及したように、先に進まなければならなかった、からである。この重文にはスターの心情が良く表現されていて、私は感動する。

ヴァース 2 は、ハンブルク出稼ぎのこと。1962 年 11 月上旬と同 12 月下旬、スタークラブに出演した。前半は、*(I) went to Hamburg, (where) the red lights were on, with George and Paul, and my friend John.* のように読むと、解りやすい。なお、『赤いライトに照らされて』という対訳は疑問。私ならば、「あちこちで赤いライトが輝いていた」というような意識にする。ナイーブな読者のために説明すると、この *the red lights*（定冠詞付き）はステージの照明ではない。売春宿の看板のことである。

We rocked all night. We all looked tough.（一晩中演奏したよ。タフに見えただろうね）は、エプスタインがマネジメントを開始する（1962 年 1 月）以前に結んだ出演契約に基づく結果のはず。スターが所属するハリケーンズとの二枚看板（ハリケーンズがビートルズより上位）になったのは、1960 年 10 月～11 月にカイザーケラーに出演した時だった。

続く *We didn't have much, but we had enough.*（厚遇されたわけじゃなかったけど、必要なものはそろっていた）は、ダブルミーニングになっていると推測できるかも知れない。もう一つの読みは「もてなされたわけでもなく、もう飽き飽きだったよ」。ただし、この場合、私としては、接続詞は *but* ではなくて *and* であって欲しい。加えて、否定的な感じの挿入は、この歌には馴染まない。

と『すべての道は天国へ続くのさ』という意味とは考えられない。話者は他者の発言内容を否定しているわけではない。別の道がないかと、インドまで行って見たものの、(ヒンドゥー教を含めて)宗教家たちの「説教の言葉は違っても、どの道も天国へ繋がる」ことが分かったと言っているのだ。

また、『クリシュナは善良な男だった　なのになぜあれほど卑猥だったのか』にも疑問を覚える。善良だったら、卑猥なことはいらないはず。Krishna was a good man. Why was he so blue? の blue は、内面のこと(悲観した、猥褻な)を言っているかのようだが、私の解釈によると、実は違う。肌の色のことと思われる。彫像や絵画を見ると、クリシュナの肌は青で描かれていることが多い。その理由は、青は海と空の色で、広大で遥かな領域のすべてを包み込む色だからだそう。このジョークの対訳は「クリシュナは善良な男だった。(それなのに)彼はなぜブルーだったのだろう?」と、ダブルミーニングの余地を明確に残しておくのが適切だろう。なお、実在した人物と見られるクリシュナは、遊牧民から新興宗教の伝道者になったようなので、「転身する準備ができていた」が当てはまる。

コーラスの2回目が終わり、間奏に入る直前、スターが Play me to heaven. と言う。face the final curtain とか All roads lead to heaven といった詞を踏まえうえて、「君たちの演奏で、僕を天国に行った気分させてくれ」という意味だろう。

ヴァース 4。ヴァース 1と同じ詞で始まって同じ詞で終わるが、その間が異なる。イエスに言及する替わりに、Everyone can get there 'cause we all have a soul. と言う。このラインを文脈の流れで読むと、「みんな、達成できるよ。僕たちには情熱があるんだから」。「転身する準備ができているかい?」と続く。他方、次のような読み方も考えられるかも知れない。それは、「みんな、そこへ(天国へ)行けるよ。魂があるんだから」。しかし、この場合、続く Are you ready to cross over? を「あの世へ行く準備ができているかい?」と解釈することになろう。

コーラス末尾の Someone's there to catch you when you're ready to let go. の繰返しの後、誰かが南部なまりで That's the real thing, isn't it? (これって、本当のことだよ)と言う。そして、ラウンドヘッズ数人の笑い声が聞こえる。ビートルズの〔Within You Without You〕のエンディングを模したと思われる。

〔M-356〕 **SING THE CHANGES**

主旋律は、同じ4小節の繰返し。詞は、私の聴き取りによると、次のよう： Like the sunbreak in the morning / Feel the quiet, feel the thunder / Oh, every ladder leads to heaven / Call it ransom, draw the picture // Sing the changes, oh, as you're sleeping / Feel the quiet in the thunder / See the changes rolling over / Feel the quiet in the thunder // Like the sunbreak in the morning / Feel the quiet, feel the thunder / Every ladder leads to heaven / Colored pencils, draw the picture // Sing your praises as you're sleeping / Sing the changes, any wonder / Feel the sense of childlike wonder / Sing your praises as you're sleeping // Sing the changes, oh, as you're sleeping / Feel the quiet in the thunder / See the changes rolling over / Feel the quiet in the thunder // Sing your praises as you're sleeping / Feel the quiet in the thunder / See the changes rolling over / Everybody, have some childlike wonder [ブレイク] (Childlike wonder) / Sing your praises as you're sleeping / Feel the quiet in the thunder / See the changes rolling over / Everybody, have some childlike wonder 。

私が受けた印象は、話者（マッカートニー）が自然の姿に驚嘆し、それを称賛する様。造物主である神に対する畏敬も感じられる。

マッカートニーは、このナンバーを2009年ツアーのセットリストに含めていた。ライブ盤 GOOD EVENING NEW YORK CITY（本書119ページ）に収録されているので、UCCO-3015付属のブックレット（歌詞聴き取り&対訳：ザ・ビートルズ・クラブ）を参照しながら、詞を読んでみよう。ELECTRIC ARGUMENTS のトラックとは異なる箇所もある。

出だしは、『Like the sun playing In the morning』とは聞こえない。私の聴覚によると、Like the sunbreak in the morning である。そして、ヴァース1の最後のラインは、『Call it ransom Draw the picture』ではない。それは、ファイアマンのバージョン。このライブでは、See the changes, draw the picture に替えている。Call it ransom（それは神の赦し）は余りに宗教的と自覚した結果の修正かも知れない。

〔S-103〕 **THE OTHER SIDE OF LIVERPOOL**

映画のヒット後に続編が制作されることがよくある。他方、このスター作品は逆の展開になっている。2年前（2008年1月）に発表した〔Liverpool 8〕で歌った時期（工員としての就職～音楽活動開始～ビートルズの成功）以前の、彼の生い立ちを語っている。

出だしのライン The other side of Liverpool is cold and damp. は「リヴァプールの裏側には面白みや活気がない」という意味のはず。上品だったり華やかだったりする地区から距離が遠く離れていたり、地形が大きく異なっているわけではないので、つまり、気候が違うわけではないので、対訳の『気温が低く、湿度は高い』は当たらない。別の表現として、スターが THE BEATLES ANTHOLOGY で使った言葉は、dark and dreary（陰気で退屈）だった。

そのような環境から抜け出す手段になったのが、Only way out of there — drums, guitar and amp。話の順序として早すぎる嫌いがあるが、damp と amp との押韻のために仕方なしか。

The other side of Liverpool, where I came from. My mother was a barmaid. の後に注意。At the age of three, my father was gone. に対する『父は僕が3歳のころに死んだ』は誤訳。正しくは、「僕が3歳の時、父が家から出て行った」である。リンゴ・スターの経歴など、ちょっと調べれば分かるはずなのに、対訳者の怠慢には呆れてしまう。

Dave, if you are listening, well, you know what I mean. It was you and Brian Briscoe (that) got me through my early teens. で言及しているのは、Davy Patterson と Brian Briscoe（『Driscoll』ではない）。THE BEATLES ANTHOLOGY における回顧によると、三銃士のような仲だったとのこと。

ヴァース2。You just had to laugh.（惨めさに笑うしかなかった）の理由が We had to go to Steble Street just to take a bath.。アドミラル道路の住居（本書84ページ参照）には浴室がなかったため、ステブル通りにあった公衆浴場を利用せざるをえなかったという話である。地図を見ると、1キロ近い距離になる。

I would impart what I've come to feel. にある impart（伝達する）は、堅い言葉で、場違いの感じがする。単に tell you でよかっただろう。伝えたいことというのが Love is the answer, and it is real. 。ジョン・レノンが〔Mind Games〕で歌った Love is the answer, and you know that for sure. (© 1973 Lenono Music) (愛があれば解決する。君も知ってのとおり)を思い出す。そして。締めめ I'll always be there beside you. で、私は少しほっとした。

詳述したように、求愛するにはロマンチックな歌詞ではない。ではあるものの、英文読解のトレーニング用材料と考えれば、聴いて落胆することもないだろう。メロディーも心地好い。

〔S-105〕 **TIME**

‘ビートルズ旋風’が日本で吹き荒れる状況を経験した人ならば、1964年にデヴィ・クラーク・ファイヴがアルバムに収録した〔Time〕を知っているかも知れない。1967年には、米国のナック（英国のナックとは別バンド）が〔Time Waits For No One〕をシングルで発表。これと同名（異曲）の作品がローリングストーンズの1974年のアルバムにもあった。そのような訳で、タイトルからも、出だしのライン Time waits for nobody（時は待ってくれない ⇒ 時は無情にも過ぎて行く）からも、私が受けた第一印象は冷めたものだった。

しかし、その次のライン and nobody waits for time にスターの言葉らしい面白さが表われている。「誰も時が来る（過ぎる）のを待ちはしない ⇒ 誰も時間を無駄にしない、誰しも時に先駆ける」という意味だろう。

その後は、取り立てて説明する必要はないはず。ただし、CD付属のブックレット（『聴き取り及び対訳：若月真人』）にある誤りを指摘しておきたい。コーラス1の最後のラインだが、『today is the best day of your life』は、あくまで文脈に沿った読み。実際は、Today is the best day of our life, alright. と歌っている。

コーラス2における Now I can forget about yesterday. も、スターの歌い間違いと考えられる。後続の三つのラインとマッチするのは、Now we can forget about

〔S-368〕 (I WANT TO) COME HOME

簡潔に言うと、ピアノ・バラッド。弦楽器を除く楽器のすべてをマッカートニーが演奏している。歌詞は、私の聴き取りによると、下記のごとし。

ヴァース 1 : For so long, I was out in the cold, and I taught myself (2回目は but I taught myself) to believe every story I told. It was fun hanging onto the moon, heading into the sun. But it's been too long. Now I wanna come home. 。ここでの the moon は「高い目標」、the sun は「栄光」のことではないだろうか。私がそのように思うのは、Wikipedia 掲載のあらすじによると、映画の主人公は高年齢引退の身分。妻に先立たれる前に4人の子供を巣立ちさせている。そして彼らが成功するように後押ししていた。よって、マリファナやウィスキーなどのこととは考え難い。

ヴァース 2 : (I) came so close to the edge of defeat, but I made my way in the shade, keeping out of the heat. It was fun shooting out at the stars, looking into the sun. But it's been too long. Now I wanna come home. 。この the stars は、ヴァース 1 にあった the moon と同じことを指していると推察できる。

ミドル : Home, where there's nothing but sweet surrender to the memories from afar. Home — to the place where the truth lies waiting — we remember who we are. 。家族が集うホームに話者が思いを馳せるのは、子供たちと疎遠になっているため。to the place where the truth lies waiting は、前ヴァースの come から続いている。また、このラインに替えて where を挿入すると、つまり、Home, where we remember who we are. のように理解すると、合点が行く。

ヴァース 3 : For too long, I was out on my own. Every day I spent trying to prove I could make it alone. It was fun hanging onto the moon, heading into the sun. But it's been too long. Now I wanna come home. 。子供たち 4 人を招いても誰も来ないので、主人公は自分から出向くことにする。長女に尋ねて分かったのが、疎遠になった原因。彼は子供たちに期待を寄せるばかりで、彼らに耳を傾けなかったことだった。自分が考える理想で頭が一杯だったわけだ。

〔S-110〕 **ANTHEM**

歌の趣旨が、ヴァース 1 出だしの This is an anthem for peace and love. (これはピース&ラブ運動の象徴歌) に端的に表われている。

と思いきや、ヴァース 2 では This is an anthem of peace and love. に変わってしまった。これだと、私の感覚では、「これは平和と愛の賛歌」という意味。未だ達成できていないのだから、前置詞は for のほうが最適ではないだろうか。

UICY-15139に付属するブックレット内の対訳(日本語翻訳:ザ・ビートルズ・クラブ)を見ると、ブリッジ1前半の読解、和訳は簡単ではないようだ。You think you got it covered. を『大丈夫だと君は言う』と対訳するのは、乱暴。私が正確、丁寧に訳すならば、「そのための対策は取ってある、と君は思っている」。そして、You say you know the score. は、単に『分かっている、と君は言う』という意味ではない。「進捗状況は分かっている、と君は言う」というのが適切な和訳になる。

後半の But do we, do we know what for? は厄介。何を指すのかが明らかでないからだ。But people are dying. を指すのであれば、反語で、「でも、人々が何のために死ななきゃならないのか、僕たちには理解できない」というのが的確な和訳になるだろう。他方、直前の There's no denying. を指すのであれば、「でも、否定できない理由を、僕たちは認識しているだろうか?」と読むことになるだろう。

コーラスの We know it's true. We know what we gotta do. にも悩まされる。2 回目は、ブリッジ 2 の 'cause we know what to do に続くので、問題ないのだが、1 回目は、前述の But do we know what to do? の答になるような位置関係にある。つまり、重要な繰り返し部の意味が、1 回目と2 回目で異なってしまう。これはリスナーを混乱させるので、ヒット性を損ねる原因になりえるだろう。

ブリッジ 2。最初のラインは、『It's not all knives and bullets』ではない。私の耳と脳によると、It's not all mines and bullets. (地雷と銃弾だけの話ではない) である。But never say never. は、この文脈では But never say it is never possible to achieve that. のような意味。「無理なことだなんて、決して思ふな」と言っている。

して、3回目と4回目は Me and the boys, me and the band 。この the boys は、the band のメンバー、つまりバンド仲間のことだろう。live out fantasies は、「気ままに生きる」。

末尾の That's how it was for me. How was it for you? (君の若い頃はどうかだった?) が好い。リスナーが自らの状況や体験を想起こそ切っ掛けとなる。

ヴァース2の前半 At H. Hunt & Son in Liverpool, an apprentice engineer, but I had something very clear in my mind. に登場する H. Hunt & Son は、スターが就職した企業。装飾用や学校内ジムで使用する横木などの製造をおこなっていたようだ。この社名は THE BEATLES ANTHOLOGY にも記されている。また、同社のクリスマス・ダンスパーティーで撮影されたスターの写真が掲載されている。彼は建具師になる予定だったが、歌われているように、見習いで終わった。

と言っても、一人前の建具師になる考えはすぐに捨ててしまう。その理由が同ヴァースの後半で次のように語られている: In Liverpool, music was my goal in my heart and in my soul and in my mind. 。同じ職場の同僚二人とスキッフルのバンドを組んだのだ(本書125ページ参照)。

ブリッジ2。Walking to the Iron Door on a beautiful night. で言及しているのは、the Iron Door Club という名の旧ジャズ・クラブ。『鉄のドア』ではない。1960年から1964年まで営業したようだ。この間、Wikipedia によると、1960年5月15日にシルヴァー・ビートルズが出演している。また、THE BEATLES - THE ULTIMATE RECORDING GUIDE には、1961年3月11日にはビートルズやローリー・ストーム&ハリケーンズ(本書83ページ参照)などが演奏したという記述がある。

アイアンドアへ行った結果が Well, I knew I wanted more. It felt so right. 。生で観て聴いて感動したのは電気増幅されたビート音楽だったに違いない。It felt so right. は、『それはとても正しいことに感じた』というより、「自分にぴったりという感じがした」ということだろう。スターがプロのドラマーとしてローリー・ストーム&ハリケーンズに加入したのは1960年7月と、私は理解している。

レンタインズ・デイ（2月24日）に、彼女を想って書いた歌。何年のことかは不明だが、おそらく、2011年だろう。ふたりが交際を始めたのは2007年11月らしい。婚約が発表されたのは2011年5月で、結婚は5ヵ月後の10月だった。KISSES ON THE BOTTOM リリースの3ヵ月前のことである。

UCCO-3038のブックレット（対訳：ザ・ビートルズ・クラブ）に載っている歌詞印刷は、最初のラインから間違っている。『What if it rains』ではなく、正しくは、What if it rained? 。[réin]の後にはっきり聞こえる音は、[d]であって、[s]ではない。この文は、後続の三つの文が過去時制であるように、話者の回想を表わしている。話者が当時、実際に What if it rains? と言ったか思ったのであれば、時制の一致を施した間接話法と考えてもよい。

ヴァース2. as days and nights would pass me by は、ヘザー・ミルズとの関係悪化以降の状況と思われる。2002年6月に結婚したマッカートニーとミルズは、2006年5月に別居。2008年5月に離婚した。この間に出現したのが、上述のように、シュヴェル。Then she appeared. は、まさしく、このこと。なお、このヴァースにおける would と I'd は、どちらも過去の習性や習慣を表わすもの。

ミドルの後部（6小節、3行）は、And I will never let a day go by without remembering the reasons why she makes me certain that I can fly という単一の文章。can fly は、鳥や飛行機ではあるまいし、『空を飛べる』という意味ではない。「順調にやって行くことができる」というような意味である。fly の原義（飛ぶ）にこだわるならば、「飛躍することができる」と和訳する手もあろう。

ヴァース3の頭 And so I do without a care. の do は、代動詞。直前（ミドル末）にあった fly の繰り返しを避けている。一方では、敢えて someday soon the sun is （ヴァース1では、時制の一致のために was）gonna shine を再登場させているのが味噌。今度は、自然の天候への言及ではなく、話者の心境を比喻している。

ところで、エリック・クラプトンのギターが素晴らしい。即興だったそう。そして、次に取り上げる〔Only Our Hearts〕でハーモニカを吹いているのは、スティーヴィー・ワンダー。マッカートニーとの音盤上の共演は、1982年の〔Ebony And Ivory〕以来だった。

〔M-371〕 **CUT ME SOME SLACK**

ジャムで生まれたナンバーのようで、マッカートニーと上記3名の共作ということになっている。ではあるものの、歌詞は、少なくとも中核の Cut me some slack (or I will not come back) は、マッカートニーがスタジオへ持ち込んだと、私は推測する。

ともかく、スタジオ録音版の歌詞を私が聴き取ると、ヴァース 1 は以下のごとし：
Mama, set me free. Oh, mama, let me be. Oh, mama, watch me run. Mama, I wanna have some fun. 。

ヴァース 2 は、長さが半分になって、Well, mama, don't let me down. Mama, I wanna go to town. 。

ミドル： If you wanna stick around, you gotta cut me some slack. I'm gonna hit the road again and not come back. 。この slack の原義は「ゆるみ」とか「たるみ」で、物の状態のみならず、心の状態を言う場合にも使える。そこで、<cut (または give) somebody some slack> で、「・・・に対して規則を緩めてやる、息抜きを与える」という意味になる。なお、最近はパンツという言葉が主流になっているが、カジュアルなズボンを目指す「スラックス」は、slack の複数形（股の下が二つに分かれるため）ということを、この機会に確認しておこう。

アウトロは、私の耳には次のように聞こえる： Oh, mama, let me be. Mama, won't you set me free? Mother, mom, mom, mama, watch me run. Mama, watch me run. I wanna have some fun. I just wanna have some fun. Yeah, set me free. Let me be. 。

ライブにおいても、基本的に違いはない。だが、私のように、細部にこだわる人もいだろうから、私の聴き取りを記しておく。ヴァース 1 は、Mama, set me free. Oh, mama, let me be. Mama, watch me run. Mama, I wanna have some fun. 。

ヴァース 2： Well, mama, don't let me down. Say, mama, I wanna go to town. 。